

# がんの病期のことを知る

更新・確認日: 2019年07月24日 [ [履歴](#) ]

## 履歴

- 2019年07月24日 用語集へのリンクを追加しました。
- 2019年04月23日 「患者必携サイト」から移設しました。
- 2013年10月15日 普及新版(2013年9月発行)の内容に更新しました。
- 2012年02月01日 掲載しました。

[閉じる](#)

このページは、書籍「患者必携」シリーズの内容を抜粋して掲載しています。

1. [がんの進行の程度を知るための指標が「病期」です](#) 2. [病期を知ることと治療を考えることは密接な関係があります](#) 3. [病期を決める要素はがんの種類によって異なります](#) 4. [病期分類の例: TNM分類では0~IV期の5段階に分類します](#) 5. [病期の判定から治療法決定までの流れ](#) 6. [病期によって治療法が大きく変わることがあります](#)

検査により診断された、がんの状態を客観的に示す「病期(ステージ)」に基づいて、最も適した治療の進め方が検討されていきます。

## 1. がんの進行の程度を知るための指標が「病期」です

がんの治療について検討するときには、がんの広がりや進行の程度、症状など、病気の現状を踏まえた上で、最も治療効果が高く、体への負担の少ない治療を選択していきます。がんの状態を知るための指標が「病期」です。病期は、がんが体の一部分にとどまっているか、広い範囲に広がっているかの「目安」になります。

## 2. 病期を知ることと治療を考えることは密接な関係があります

病期を知ること、これからの治療の目安についておおまかに予測することができます。例として、以下のことがあげられます。

### ・今後の見通しを立てる

もしこのまま治療をしない場合、どのように進行していくのか。[予後](#)はどうか。

### ・治療の実績を知る

がんの種類や進行の度合いが同じ患者さんで、これまでどのような治療が行われているか。その効果と予後はどうか。

### ・治療の効果を予測する

ある治療を予定しているが、自分と同じ状態の患者さんでの治療効果はどうか、どんな副作用があるか。

### ・治療法の選択に役立てる

複数の治療法を検討しているが、どれが自分の今の状態に対して有効な治療か。

### ・病状の比較をする

ほかの人のがんの治療法やその後の経過について聞く機会があったが、それが自分に当てはまるかどうか。

病気の治療方針を考えると、これまで、同じがんの種類や状態の患者さんに、どのような治療が行われ、その効果はどうだったか、ということを知っておき、自分にとってその結果が当てはまるかどうか、同じように行うことが可能かどうかを検討します。このように病期を知って治療の目安を得ることと、実際に患者さんに対して治療を行っていくことは、密接な関係があります。

### 3. 病期を決める要素はがんの種類によって異なります

がんの特徴を示すものとして、場所や大きさ、広がり、[病理検査・病理診断](#)でわかるがん細胞やがんの組織の性質など、病気の経過に強い影響を及ぼす客観的な指標を組み合わせることによって、がんの病期が決められています。こうした病期はがんの種類によって異なるだけでなく、同じがんでもさらに細かく分類されたり、治療の前後で判定方法が異なっていたり、国によって違う方法を採用していたりするなど、治療経過や目的によって変わることがあります。

### 4. 病期分類の例：TNM分類では0～IV期の5段階に分類します

病期分類の1例としては、国際対がん連合の「TNM分類」があります。病期は以下の3つの要素を組み合わせられて決められます。

1. がんがどのくらいの大きさになっているか(T因子)。
2. 周辺のリンパ節に転移しているか(N因子)。
3. 別の臓器への転移はあるか(M因子)。

これによって病期を大きく0～IV期の5つに分類します。0期に近いほどがんが小さくとどまっている状態、IV期に近いほどがんが広がっている状態([進行がん](#))です。

がんの種類によっては、TNM分類を基本にさらに細かく分類したり、患者さんの体調や年齢など、ほかの因子を追加したりすることもあります。また、がん細胞の遺伝子の特性や腫瘍マーカーによる分類を行うこともあります。必ずしも細かい内容や項目について知っておく必要はありませんが、検査の目的や結果が今後の治療の見通しとどう関連しているか、ある程度知っておくと、担当医の説明を聞くときの参考になります。

### 5. 病期の判定から治療法決定までの流れ

病期や患者さんの状態などをもとに治療方針が検討されます。最近では、ある特定の病状の患者さんについて、適切な診療上の判断を行うことを助ける目的で、系統的につくられた[診療ガイドライン](#)を参考にして、治療方針が検討されるようになってきています。診療ガイドラインには、ある状態の一般的な患者さんに対して、推奨される治療との対応をわかりやすく示したものを、「アルゴリズム」「フローチャート(流れ図)」として示しているものもあります。

最終的な治療方針は、さらに患者さんの全身状態や年齢や希望など、さまざまなことを考慮して、担当医と十分相談しながら決めていきます。

### 6. 病期によって治療法が大きく変わることがあります

がんの治療法は、がんがある場所に対して治療を行う手術や放射線治療などの「[局所療法](#)」と、全身に広がったがんに対して治療を行う薬物療法(抗がん剤治療)などの「全身療法」に分けられます。局所療法は治療を行った場所については、がんを取り除くことができるなど、高い治療効果を発揮しますが、治療の範囲の外にがんがある場合は、その部分は引き続き体にとどまることとなります。一方、全身療法は点滴による抗がん剤などで、体の隅々までがんに対する治療を行うことができますが、一部のがんを除き、がんを根絶するまでの高い治療効果を得ることは困難です。

#### ・胃がんの病期と治療法の例

\* 全ての患者さんに、そのまま当てはまるわけではありません。

- I期の胃がんの一部では、内視鏡治療により、手術と同等の治療効果があります。このため、体の負担がより少ない内視鏡治療が積極的に行われています。
- III期までのがんでは、手術を中心とした治療が標準治療であり、まず手術治療の可能性が検討されます。
- 手術のときに、がんの周りのリンパ節について術中迅速病理診断(じゅつちゅうじんそくびょうりしんだん)を行うことで、がんの広がりを調べる場合があります。リンパ節への広がりの有無によって病期が異なり、がんが広がっていなければ、より少ない範囲の切除で治療効果を得ることができます。
- IV期の胃がんに対しては、多くの場合化学療法が行われます。状態に応じて、体への負担がかからないような副作用の少ない治療を行ったり、進行したがんによる痛みやだるさなどの症状を和らげる治療やケアをより重点的に行っていきます。

このように、がんの病期に応じて、手術、薬物療法、放射線治療などのさまざまな治療法を単独で、あるいは組み合わせて行うことで、患者さんに最適な治療法が検討されていきます。